コンテクスト重視の和文英訳

杉浦 正好
Anthony G. Ryan

はじめに

2008年12月に公表された、高等学校学習指導要領改定案（2013年度実施）によれば、「外国語」の各英語科目において、「言語活動を英語で行う」とされている。ただし、「外国語科」改訂のポイントとして、「生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため，授業は英語で行うことを基本とする」ことが付記されている。生徒の理解に応じた英語を用いることも許容されるが、母語である日本語の使用には少なからず制限が加わることになろう。

Communicative Language Teachingの理念から遊離した現状からすれば、このような転換は歓迎すべき流れであろう。同時に、英語のライティング指導も大きな転換点を迎えている。現行の「ライティング」と称する科目が消滅し、4技能を統合した指導を念頭に置いた「コミュニケーション英語」が創設される。結果として、従来のライティングの指導形態は影を潜め、和文英訳は教科書から排除される可能性が高いと思われる。

4技能を統合した指導形態への移行を大筋では歓迎しつつも、本稿では、和文英訳を中心とした指導法の再評価をあえて試みたい。語彙や構文の単なる置き換えではなく、コンテクストを重視し、英語らしい英語を目指すものである。自由英作文への移行活動として位置づけ、コミュニケーション能力の素地を培う手段の1つとするのである。Part 2では、その実践例の1つとして、朝日ウィークリー連載の「英文ライティング道場」を用い、

コンテクスト重視の和文英訳のあり方を試みたい。英語のコメントを含めて、添削では、Ryan 氏の教示することが大であることを申し添えたい。なお、本稿では、出典の兼ね合いもあり、自由英作文と Creative Writing を便宜上同じ意味で使用する。

Part 1 英語教育における和文英訳

1. 和文英訳は悪か？

ライティングの目標は、まとまりのある内容を文字で表現することである。このことから判断すれば、自由英作文こそが英文ライティングの活動としてふさわしいとされ、和文英訳は、下記の 7 つの理由で批判に晒されることになる。中には、誤解に基づく根拠や、指導法によって解決できる内容も含まれている。

（1）日本語で考える習慣になる

第 2 言語ではなく、外国語として英語を学ぶ環境下では避けて通れない問題である。山村（1980, p. v）は、ライティング指導としての和文英訳について次のように述べている。

> 和文英訳式の練習方法が一番よい方法だと決して思っておりませんが、私たちは日本に住み、日本語を使って生活し、日本語で物を考えているのです。それ故、私たち日本人にとっては、「和文英訳」が英文の核であることを忘れてはいけないと思います。

第 2 言語ではなく、外国語として英語を学ぶ環境下にある日本の教育事情を考慮したものである。現状では、日本語で考える習慣を排除するのは不可能に近いと言ってよいだろう。無理にそのような環境に逆らうのではなく、母語を活用する発想も残しておくべきではないだろうか。

（2）日本語的な不自然な英語を作る。

日本語をそのまま英語に置き換えることの弊害を指摘したものと思われる。和英辞書の見出し語の訳だけを頼りにしたり、翻訳ソフトを安易に利用したりすれば、コミュニケーションとして不適切な英語が蔓延することになろう。これらをツールの１つとして理解及び活用させるための時間と指導こそが必要ではないだろうか。原語の意味や状況を把握し、英語として最適に表現するストラテジーを身につけることが大切である。

（3）コミュニケーション活動でない

コミュニケーション活動は重要ではあるが、英語の授業はすべてコミュニケーション活動でなければならないことはない。Communicative Language Teaching の先駆者である Littlewood（1981, p.8）は、communicative activities に先立ち、pre-communicative activities が必要であると述べている。

> The learning activities themselves are 'pre-communicative' rather than 'communicative'. That is, they aim to equip the learner with some of the skills required for communication, without actually requiring him to perform communicative acts.

pre-communicative activities は accuracy（正確さ）を求める活動であり、和文英訳を pre-communicative activities の１つとみなすことも可能である。和文英訳を上手に活用すれば、communicative activities の要素を持つ自由英作文への橋渡しと考えてもよいだろう。

（4）創造的な活動ではない

第１に、作文本来の自己表現性がないことが挙げられる。事実ではあるが、語彙や表現の乏しい初心者に最初から創造性を求めるのは酷ではないであろうか。「何でもよいから自分の考えを自由に書きなさい」と言われ

て困った経験を持つ人は少なくない。自分で表現したいことが必ずしもいつもあるとは限らないからだ。日本の教育現場では、その場で自分の意見を日本語で述べる機会も練習も少ないことも事実である。基礎的な英語表現力を養うことが先決ではないだろうか。

第2に、和文英訳は自分の考えたことを相手に伝える活動ではないことが挙げられる。コミュニケーションの内容は、すべて自分の意見や考えばかりとは限らず、他人の意見や考えを立派に伝えることも創造的な活動ではないだろうか。

和文英訳と自由英作文の両方の指導経験が豊富な中尾（1991, p.72）は、和文英訳と創造性の関係について次のように主張している。

> 他人の意見が英語で述べられるようになってこそ、自分の意見も英語で表現できるようになるのではないか。他人の意見をいかに正確に、適切に、無駄のない、しかも力強い英語で表現するかということもcreativityの一部ではないか。

情報を伝達する効果的な手段を身に付けさせることも創造的な活動に含まれ、和文英訳を課題文の内容を学習者の知的水準に合わせたcreativeな活動にすることができると述べている。

（5）翻訳は特別な技能であり、言語活動ではない

教室での和文英訳は、手段であって、目的ではない。英語学習の手立ての1つとして活用すべき言語活動にしたいものである。適切に指導すれば、言語間の相違を利用し、両方の言語に対する理解を深める言語活動へと発展させることができる。本末転倒にならないように留意すべきであるが、異文化理解をも含めることができる。

（6）書く量が少ない。

確かにその通りであるが、自由英作文を併用し、その比率を徐々に増や

すことを勧めたい。語彙・構文の知識を深める intensive な活動を和文英訳とすれば、自由英作文は量を重視する extensive な活動として位置づけたい。この2つを両輪として、本格的な英文ライティングへと発展させたい。

（7）文単位で考える習慣がつく

文相互の関係を意識しなくなり、段落や文章のレベルで書くことができないとの指摘である（石黒ほか　2003）。これは、教材と指導方法の問題である。1文のみの和文英訳に終始すれば、このような結果が生まれるであろう。2文以上で、コンテクストのある和文英訳を徐々に増やせば、結束性（cohesion）や一貫性（coherence）などの前後の繋がりを意識させることが十分に可能である。

2. 和文英訳の効用

上記は、和文英訳に対する批判に応えたものであるが、そのプラス面をもう少し積極的に述べてみたい。そもそも、英語授業における母語の使用が諸悪の根源なのであろうか？ Harmer (2007: 133) は、外国語の使用を奨励しつつも、母語使用の利点を4つ挙げている。（1）第2言語との比較が容易になる。（2）両方の言語の違いを示すことで、外国語の誤りを理解させることができる。（3）翻訳活動は学習者の自然言語処理行為を利用することができる。（4）翻訳することで、学習者の文法や語彙の理解度を測ることができる。

日本の英語教育界で和文英訳が重宝されてきたのはそれなりの理由がある。渡辺（2001: 21）はプラス面として、（1）既習の日本語の知識が活用できる、（2）書く内容について考える必要がない、（3）言語材料（特定の語彙、表現、文法事項）の指導や学習に適している、（4）多くの生徒に対しての指導（一斉指導）や評価がしやすい、（5）日英語の言葉・

発想・文化の違いについて指導・学習ができる、などを列挙している。

もう少し具体的に擁護する意見も少なくない。NHK ラジオ英語会話元講師の松本（1967）は、英語上達への道は「英語で考える」ことであると長年にわたり唱えていた。ところが、和文英訳については英語の修行として高く評価している。「松本亨・英作全集」を著し、その第 1 巻「はしがき」に次のように述べている。

> 1 人の人の誤りは、他の人にも通ずる共通の誤りであることもよくわかります。それは、ことばをかえていうならば、1 人の人への教えは、他の人の教えにもなるということです。このことは、現場の教室でも実験しました。問題を出して、1 人の学生に代表として解答を黒板に書いてもらい、それを批判していく方式の授業と、自由作文を書き、それを添削して返してやる方式の授業と比較してみましたが、前者は後者にくらべ実力が 20%も上昇していることが、わずか 3 ヶ月のうちに明らかになりました。（p. i）

上記の実験と結果についての詳細なデータはないが、外国語学習の 1 つのアプローチとしての有効性を記している。

松井（1993: 18）は和文英訳の欠点として、日本語の干渉が強くなることを指摘しつつも、日本語の干渉による誤りは、「日英語の違い、日英文化の差を自覚させるきっかけともなり得るのである。」と述べている。さらに、和文英訳の効用を次の 2 点にまとめている。

（1）文法事項を的確に理解させるためにはかけがえのない大変効果的な方法である。

（2）与えられた内容を書かざるを得ないので、教師側が、語彙・表現形式等工夫して網羅的に与えれば語彙力・表現力をのばすことができる。

実証的な研究成果も報告されている。Friedlander (1990, p.124) は、学習者の第 1 言語が英語のライティングに及ぼす影響についての多くの研究者の成果を 3 点にまとめている。その内の第 2 点目は、母語から英訳することの効用を述べたものである。

> Second, translation from the native language into English appears to help rather than hinder writers when the topic-area knowledge is in the first languages. Writers would thus lose little by writing in their first language and then translating into English at the appropriate time for their emerging texts.

日本語を英訳する効果を証明する研究も報告されている。Kobayashi and Rinnert (1992) は、48 人の日本人大学生に、日本語から英語に訳す方法と、直接英語で作文する方法で比べた結果、下位群の学習者は前者の和文英訳の方が、内容・構成・文体においてかなりよい結果が得られ、統語的にも複雑な英文を書いていると報告している。英語学習初級者における和文英訳の有効性を証明した研究であり、自由英作文への橋渡しとすることを示唆したものであろう。Uzawa (1996) は、カナダ在住の日本人学習者を被験者として実験し、和文英訳における言語使用の質は、統語的にも語彙的にも優れていると報告している。英米のライティング指導には母語を英語に翻訳する活動は少ないが、Brookes & Grundy (1998: 150) は、母語で書かれたガイドブックを、英語話者のために英語に翻訳する活動を紹介している。母語で書かれたものを cue として、ライティング指導を試みた例である。

日本人の英語力が不足しているのは、母語ばかりで授業をしているからだと一般に言われている。確かに、文法説明と「英語から日本語への置き換え作業」に終始する授業ではコミュニケーション能力の養成はおぼつかないが、指導方法と内容に工夫があれば、和文英訳にもそれなりの効果が

期待できるものと言えよう。

3. まとめとして

英語教育に限らず、理論的な枠組みを対立した概念を使って説明しようとする傾向がある。本稿では、fluency（流暢さ）と accuracy（正確さ）、content（意味内容）と form（文法形式）の 2 組の概念を使って和文英訳について考えてみたい。

リーディング・ライティング・スピーキング・リスニングの 4 技能の習得には fluency（流暢さ）と同様に accuracy（正確さ）が必要であると言われている。ライティングに絞って考察すれば、前者には、より多くの英文を書くという量的なアプローチ、そして後者には質的なアプローチが求められる。

同様にして、content（意味内容）と form（文法形式）の概念も重要である。Ur (1996, p.163) は、ライティングにおける content と form のバランスについて次のように述べている。

> The purpose of writing, in principle, is the expression of ideas, the conveying of a message to the reader; so the ideas themselves should arguably be seen as the most important aspect of the writing. On the other hand, the writer needs also to pay some attention to formal aspects: neat handwriting, correct spelling and punctuation, as well as acceptable grammar and careful selection of vocabulary. This is because much higher standards of language are normally demanded in writing than in speech: more careful constructions, more precise and varied vocabulary, more correctness of expression in general. (p.163)

伝えるべき content（意味内容）が最も重要であるが、ライティングで

は form（文法形式）にも注意を払うことが重要であると主張している。

以上の 2 組の概念（fluency / accuracy と content / form）の内、fluency と content には自由英作文の利用が有効であろう。一方、読み手に誤解を与えないようにするため、意味を正しく伝えるためには、accuracy と form の概念が欠かせない。この 2 つの概念はコミュニケーション能力の下位要素である grammatical competence（Canale 1983）を培うことで達成される概念であろう。具体的には、文法・語法・文型などの理解と定着が求められることになる。和文英訳を中心に据えた指導が果たすべき役割がここにあるように思われる。

Part 2「英文ライティング道場」の試み

「英文ライティング道場」（朝日ウィークリー誌）が 1996 年 10 月に連載されてから約 2 年半になる。「和文英訳」とタイトルを付けなかったのは、「和文英訳」が「語彙の置き換え」と一般に誤解されている危惧があったからである。「英文ライティング」の呼称には、「自然な日本語を自然な英語にすること」を目標とし、「和文英訳」から「自由英作文」への橋渡しになるようにとの願いが含まれている。

編集方針は以下の 7 点である。

- 中級英語学習者を対象にする。
- 日本語から英語への置き換えだけにしない。
- 投稿者の作品を可能な限り多く例示する。
- ネイティブとの共同執筆とする。
- 「正確さ」を重視し、共通の文法的な誤りを指摘する。
- コンテクストが分かりやすい、2〜3 文程度の日本語文を選ぶ。
- 課題は朝日新聞社発行誌から選び、時事的な話題が望ましい。

下記の内容は Anthony Ryan 氏との共同執筆である。特に明示されていなければ、英語のコメントはすべて Ryan 氏によるもので、discourse analysis（談話分析）が理論的背景となっている。なお、下記の分類は整理の都合上便宜的なものである。

1. 語彙（vocabulary）レベル

1.1 代名詞と冠詞

日本語には冠詞がなく、代名詞は省略されることが多い。そのため、代名詞や冠詞を補って訳出する場合は、コンテクストを考慮する必要がある。「昨日、どこかで財布をなくした。」は I lost <u>my</u> wallet somewhere yesterday.となる。財布は 1 つしかないのがふつうであるからだ。I lost <u>a</u>

wallet. とすれば、財布をたくさん持っていることになってしまう。

（1）約 2 週間の米国訪問

He started his visit to the United States for two weeks or so.

⇒ He started an approximately two-week visit to the United States.

文法的には下線部に問題はないが、his visit と a visit ではニュアンスが異なる。これは He made a visit to her. / He made his visit to her. を比較すれば理解しやすい。his visit だと「個人的で、特殊な訪問」の色彩が強くなる。for two weeks or so については後述する。

ダライ・ラマは（4 月）10 日にワシントン州シアトルに到着し、約 2 週間の米国訪問を開始。シアトルのほかミシガン州やニューヨーク州で仏教に関する講話を行う。米政府関係者と会談するかどうかは不明。 （注）ダライ・ラマ＝the Dalai Lama （【第 21 回課題】朝日新聞 2008.4.13）

（2）彼は入院時より 8、9 キロ減った

He lost his weight by eight or nine kilograms.

⇒ He lost eight or nine kilograms in weight.

代名詞を補ったために奇妙な意味になっている。He lost his weight. とすると「彼は体重をすべてなくした」となる。「彼は体重が減った」は、He lost weight. のように冠詞も代名詞も不要である。「彼は体重が 8、9 キロ減った」ならば、He lost eight or nine kilograms in weight. とすれば英語らしくなる。文脈が不足している場合、in weight がないと、何の重量を失ったかあいまいになる。

王監督はゆっくりした足取りで、会見場に登場した。入院前よりほおがこけ、大きい目もややくぼんで見える。本人によると、体重は現在74キロ。入院時より8、9ロ減ったという。

（【第1回課題】朝日新聞 2006.8.2）

1.2 類語

類語が存在するのは、ニュアンスの差があるからである。語の選択には、微妙なニュアンスの違いに留意する必要がある。類語は、語と語のつながりの相性を表すコロケーションとも微妙に絡んでいる。

（1）偶然の出会い

from their <u>accidental</u> encounter in their youth to her death <u>of</u> cancer

⇒ from their <u>chance</u> encounter in their youth to her death <u>from/by</u> cancer

「偶然」に相当する英語として、accidental や chance などがある。Ryan 氏によれば、accidental や by accident は「好ましくない」ことを示唆するので、内容から判断すれば、coincidental や chance が適切であるとのことである。動詞的に表現すれば、meet by chance あるいは meet by coincidence となる。形容詞の casual / lucky と名詞の meeting / encounter を組み合わせてもよい。

補足となるが、She died <u>of</u> cancer は可能であるが、her death <u>of</u> cancer にすると「がんが死ぬこと」となる。小説 *Death of a Salesman*『セールスマンの死』の例のように、death of に続くのは、人あるいは生き物である。

3月に亡くなった作家の城山三郎さんが、妻容子さんのことを書いた遺稿が見つかった。若き日の偶然の出会いから、がんで先立たれるまで、かけがえのない伴侶への思いを細やかにつづっている。 （【第17回課題】朝日新聞 2007.12.20）

（2）収益源探しを迫られている

Cellular phone companies <u>are pressed</u> to <u>seek</u> their new profit-making sources.

⇒ Cellular phone companies <u>are being pressured</u> to <u>find</u> new profit-making sources.

「探す」に相当する英語として思い浮かぶのは seek と find である。「迫られている」は be pressed to ～と be pressured to ～である。問題は、両方の語をつなぐコロケーションである。この点について Ryan 氏は次のように述べている。

> In English, it is easy to seek but more difficult to find, hence the 'pressed to seek' doesn't collocate well. More usual verb phrases include 'are being pressured to find' or 'are hard-pressed to find.'

seek と find との違いは「達成難度」の差である。seek の意味は「見つけようと（努力）する」であり、努力だけなら難度は低い。find は「見つける」という結果が求められ、難度は高い。一方、be pressed to ～は「～するようにしつこく言われる」という意味のニュアンスになり、be pressured to ～に比べて「圧力」は低い。以上のことを勘案すれば、原文にある切迫感を出すためには、be pressured to find ～の組み合わせがコロケーション（語と語のつながり）として最適である。

携帯電話のヘビーユーザーの4割強が、携帯をほとんど通話に使っていない実態が、民間研究所の調査で浮かび上がった。1人当たりの利用料金も減少する一方で、携帯電話会社は新たな収益源探しを迫られている。

（【第12回課題】朝日新聞 2007.7.22）

1.3. 逐語訳

類語の落とし穴として分類してもよいが、日本語からすぐに英語に置き換えてしまいがちな語彙や語句を取り上げたい。

（1）500点以上 ≠ more than 500

The university requires that the second-year students get <u>more than 500</u> on the TOEFL to become juniors.

⇒ The university requires that the second-year students get <u>500 or more</u> on the TOEFL to become juniors.

日本語の「500点以上」は500点を<u>含む</u>が、more than 500は500を<u>含まない</u>。日本語の意味を表すためには、500 or more や at least 500 on the TOEFLがよい。なお、over ～は年齢に使うことが多い。

横浜市立大学で、05年春に誕生した国際総合科学部の2年生の半数以上が留年の危機にひんしている。TOEFLで500点以上取ることを3年進級の必修単位にしたが、それが大きな壁として立ちはだかってしまった。

（【第5回課題】朝日新聞 2006.12.8）

（2）見渡す ≠ overlook

The deputy manager <u>overlooked</u> his staff still working in the office.

⇒ The deputy manager <u>looked (out) over</u> his staff still working in the office.

「物」が主語の場合に「見渡す」でよいが、「人」が主語の場合、overlook は「見逃す」や「見落とす」の意味になる。*Collins Cobuild English Dictionary for Advanced Learners* (2001) には "If a building or window overlooks a place, you can see the place clearly from the building or window." と記述されている。

> 夜の 10 時を回ったころだった。喫煙ルームから戻ってきた次長が、職場に残っている部下を見渡して言った。「じゃあ、始めるぞ、会議」
>
> (【第 22 回課題 *AERA* 2008.5.5)

(3) 採用する ≠ adopt

They were <u>adopted</u> and began to teach at school(s).

⇒ They were <u>employed</u> and began to teach at school(s).

adopt には確かに「採用する」の意味があるが、その場合の目的語は「考えや方針など」である。「adopt＋人」の場合は、「人を養子にする」の意味になる。appoint / employ / hire ならば問題ない。

> 採用されて教壇に立ったものの、1 年のうちに学校を去った新人教員が 301 人に及ぶことが 10 月 17 日、文部科学省の 07 年度の調査でわかった。5 年前の 2.7 倍に増えており、うち 3 人に 1 人が精神疾患を理由にしていた。
>
> (【第 27 回課題】朝日新聞 2008.10.18)

（4）～など

Numerous business enterprises from overseas countries, <u>like</u> Japan, are entering into Vietnam.

⇒ Numerous business enterprises from overseas countries, <u>including</u> Japan, are entering into Vietnam.

「など」を like や such as のように安易に置き換えると奇妙なことになる。上記では、「日本と同じような諸外国」が多く存在することになる。日本は諸外国の 1 つとすれば、including が適切である。Ryan 氏のコメントを見てみよう。

The use of 'like' is limiting in that it says only countries that are the same as Japan are doing this. However, there is no country that is the same as Japan just as there is no country that is the same as Australia. A better option is to use 'including' instead of 'like' and 'such as'.

ベトナムに日本など国外からの企業進出が相次いでいます。自分で工夫してモノをつくるベトナム人の資質が大きく関係しているようです。 （【第 19 回課題】朝日新聞朝刊 2008.2.15）

2. 文 (sentence) レベル

2.1 副詞・副詞句・副詞節

語句・句・節の配置ミスやコンマの有無により、誤解を生む可能性がある。

（1）約 2 週間の米国訪問を開始

He started his visit to the United States for two weeks or so.

⇒ He started an approximately two-week visit to the United States.

すでに最初の項目で扱った例であるが、意図とは異なる語句を修飾するケースである。この場合、副詞句 for two weeks or so は started を修飾してしまい、「2 週間の間ずっと開始し続けた」ことになってしまう。「約 2 週間」は「訪問」の期間を修飾しなければならない。修飾語句と修飾される語句をできるだけ接近させることを心がけたい。

ダライ・ラマは（4 月）10 日にワシントン州シアトルに到着し、約 2 週間の米国訪問を開始。シアトルのほかミシガン州やニューヨーク州で仏教に関する講話を行う。米政府関係者と会談するかどうかは不明。 （注）ダライ・ラマ＝the Dalai Lama （【第 21 回課題】朝日新聞 2008.4.13）

（2）必要としていた生徒さんもいたから、NOVA がなくなるのは本当にショックです

It came as a shock to me that NOVA went bankrupt because some of the students really needed the school.

⇒ It came as a shock to me that NOVA went bankrupt, because I know some of the students really needed the school.

最初の訳では、副詞節 because 以下は、直前の NOVA went bankrupt を修飾してしまい、「生徒が必要としているので倒産した」ことになる。because の前にコンマを置くことで、前にある主節全体を修飾することができる。I know を加えることによって意味がさらに明確になる。

必要としていた生徒さんもいたから、NOVA がなくなるのは本当にショックです。大変な時期に雲隠れして、生徒さんやスタッフを放り出した社長は絶対に許せません。 （【第 16 回課題】週刊朝日 2007.11.23）

（3）とくに米国では

Especially in the United State, there are said to be as many as 9,500 Japanese restaurants.

⇒ In the United States especially, there are said to be as many as 9,500 Japanese restaurants.

副詞の especially は文頭に置かない。*Longman Dictionary of Contemporary English* (2005) の especially の項にも、"*Especially* never comes at the start of a sentence." と説明があり、誤りの例として、"Especially in winter, I never liked long walks." を挙げている。"I never liked long walks, especially in winter." ならば可である。

欧米では今、日本食ブーム。とくに米国では、約 9500 軒あるとも言われる和食レストランがここ 2、3 年、年間 1000 店のペースで増えている。 （【第 11 回課題】朝日新聞 2007.6.9）

2.2 関係詞

（1）五輪が開かれている北京

In Beijing where the Olympic Games were held, many volunteers helped tourists from all over the world.

⇒ In Beijing, where the Olympic Games were held, many

volunteers helped tourists from all over the world.

修正前の文では、北京が世界に2つ存在することになる。次の2つの例を比較してみると理解しやすい。

a. Tokyo, which is the capital of Japan, is one of the largest cities in the world.
b. Tokyo which is the capital of Japan is one of the largest cities in the world.

最初の文ではコンマがあるため、東京の補足説明になる。一方、コンマのない2番目の文では、「日本の首都でない東京」も存在することになる。

五輪が開かれている北京で、世界からの観光客を手助けするボランティア。その中に「物乞い出身」がいた。しかも五カ国語を操るというから驚きだ。 （【第25回課題】*AERA* 2008.8.25）

3. 文を超えたレベル

中には、文レベルの誤りに分類することも可能であるが、コンテクスト(context) に注意を促すために、独立した分類項目として扱う。

3.1 直訳

日本語をそのまま置き換えると、意図しない誤ったメッセージを伝えることになる。日英の発想の差が浮き彫りになる例である。

（1）背中を後押し

Let's <u>push their small backs</u>.

⇒ Let's <u>give them an encouraging pat on the back</u>.

日本語で「背中を後押しする」とは、「激励」や「支援」を意味することである。英語で push one's back としたらどうであろうか。Ryan 氏のコメントを読んでみよう。

> Literal translation of the Japanese into 'pushing their small backs' or a 'small push in the back' would not be used by an English writer when describing this situation; a 'push' has negative connotations. A native English writer would be more likely to use an encouraging pat on the back as a sign of support rather than a push.

日英のイメージが正反対である。push one's back は、「(競技プレー中に) 後ろから背中をこづく」ことを連想し、他人の足を引っ張るような否定的なニュアンスになる。修正文のようにすれば、プラスイメージにすることができる。

もうすぐ入学・入園式。子どもたちが新しい生活へ羽ばたく第一歩です。期待の一方で不安を抱く小さな背中を後押しし、祝福する気持ちを伝えたいものです。 (【第 20 回課題】朝日新聞 2008.3.15)

(2) 誰がやっても同じ、単純で低賃金な仕事

There has been an increase in the number of menial, low-paying jobs that can be done by <u>anyone</u>.

⇒ There has been an increase in the number of menial, low-paying jobs that can be done by <u>almost anyone</u>.

最初の文は原文に忠実で、文法上まったく問題がない。ところが、行間

を読むと、誤ったメッセージが伝わってくる。「誰がやっても同じ仕事」とは、その仕事に携わっている人を冒涜することになり、失礼ではないだろうか。大げさに言えば、補足しなければ人権問題になりかねない。最終的には anyone の前に almost あるいは virtually を加えたい。

> ちゃんと働いているのに貧しい。そんな人たちが、なぜ生まれたのか。原因の一つは、誰がやっても同じ、単純で低賃金な仕事が増えたことです。
>
> (【第 4 回課題】*AERA* 2006.10.23)

3.2 状況のあいまいさ

（1）他の走者と接触する

Ms. Arimori fell when she <u>bumped into</u> another runner in Nihonbashi, about 23 kms from the starting line.

⇒ Ms. Arimori fell when she <u>came into contact with</u> another runner at Nihonbashi, about 23 kms from the starting line.

「接触する」は「ぶつかる」という意味であり、「bump into 人」となって問題はなさそうである。ところがこの表現だと言外の意味を浮かび上がってくる。Ryan 氏のコメントを読んでみよう。

> The use of 'bumped into' is not wrong, but it lays the blame for the incident with Ms. Arimori. In other words, it appears as if she did the 'bumping'. I don't know whether or not Ms. Arimori was at fault or the other runner(s) as I didn't see the race, so I can't comment clearly upon this point. However, to avoid the laying of blame upon a particular runner, it is probably better to be ambiguous and use 'came into contact with'.

動詞 bump の主語が Ms. Arimori だと、「有森さんからぶつかった」ことになり、有森さんに非があることになる。その場の状況は不明であるが、他のランナーにも非がないようであれば、come into contact with と中立的な表現がよいだろう。

> 5 年 3 カ月ぶりのマラソンをゴールした有森さんは、手やひざから血が出ていた。23 キロ付近、日本橋で他の走者と接触して転んでしまった。
>
> (【第 7 回課題】朝日新聞 2007.2.19)

(2) 定年後、家にずっといる夫に妻はうんざり。

The wife <u>is fed up</u> with her husband hanging around in the house all day after his retirement.

⇒ The wife <u>can often become fed up</u> with her husband hanging around in the house all day after his retirement.

「直訳」の分類に入れてもよい例である。上記のように補足しなければ、定年を迎えた夫を持つ妻はすべてこのような思いを持つことになる。断定は誤解を生み、事実上一般化されてしまう恐れがある。Ryan 氏のユーモアを含んだコメントが面白い。

> The noun-verb phrase 'a wife is fed up' is too strong because it reads like it is a fact that a wife will become sick of her retired husband. In other words, there is no room for 'possibility'. Hopefully (for me), it is not true that all wives get fed up with their retired husbands.

主語を some wives / women にしたり、often や sometimes を加えたり

して断定を避ける工夫が必要である。

> 定年後、家にずっといる夫に妻はうんざり。そんな夫婦の危機を解決してくれるのが、ズバリ「夫婦別寝」だ。いやいや一緒にいるより、ちょっと距離を置いてみれば、優しい気持ちも芽生えてくる。
> (【第 23 回課題】週刊朝日 2008.6.20)

おわりに

和文英訳を支持する理論的枠組みを構築し、その実践を「英文ライティング道場」で試みたものである。コンテクストを意識し、日英の発想の違いを理解し、自然な英語にするように心がけたつもりである。この実践の試みが、日本語から英語への語句の置き換えのみに留まらず、自由英作文を中心としたライティング指導への橋渡しとなるのが念願である。

引用文献

Brookes, A. and Grundy, P. (1998). *Beginning to Write*. Cambridge: Cambridge University Press.

Canale, M. (1983). From communicative competence to communicative language pedagogy. In Richards, J.C. and Schmidt, R.W. (eds.) *Language and Communication* : 2-27. Harlow: Longman.

Friedlander, A. (1990). Composing in English: first language effects. in Kroll, B. (ed.) *Second Language Writing: Research Insights for the Classroom*. 109-125. Cambridge: Cambridge University Press.

Harmer, J. (2007). *The Practice of English Language Teaching* (4th ed.). Harlow: Pearson/Longman.

Kobayashi, H. and Rinnert, C. (1992) Effects of first language on second language writing: Translation versus direct composition. *Language Learning*. 42(2). 183-215.

Littlewood, W. (1981). *Communicative Language Teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.

Longman Dictionary of Contemporary English (4th ed.). (2005). Harlow: Longman.

Sinclair, J. (Ed.). (2001). *Collins Cobuild English Dictionary for Advanced Learners*. Glasgow: HarperCollins.

Ur, P. (1996). *A Course in Language Teaching: Practice and Theory*. Cambridge: Cambridge University Press.

Uzawa, K. (1996) Second language learners' process of L1 writing, L2 writing, and translation from L1 to L2. *Journal of Second Language Writing*. 5(3). 271-294.

石黒昭博・山内信幸・赤松信彦・北林利治（2003）「現代の英語科教育法」東京：英宝社.

中尾清秋（1991）『英文表現の基本と実際』東京：研究社出版.

松井恵美（1993）「こうして英語を書かせてみる」『英語教育』6月号. 17-19.

松本　亨（1967）「松本亨・英作全集　第1巻」東京. 英友社.

山村三郎（1980）『英語表現の実際』東京、研究社出版.

渡辺浩行 (2001)「第 2 章　英語のライティング想定事例集—教育現場から研究トピックへ」

小室俊昭（編）『英語ライティング論』東京：河源社. 13-29.